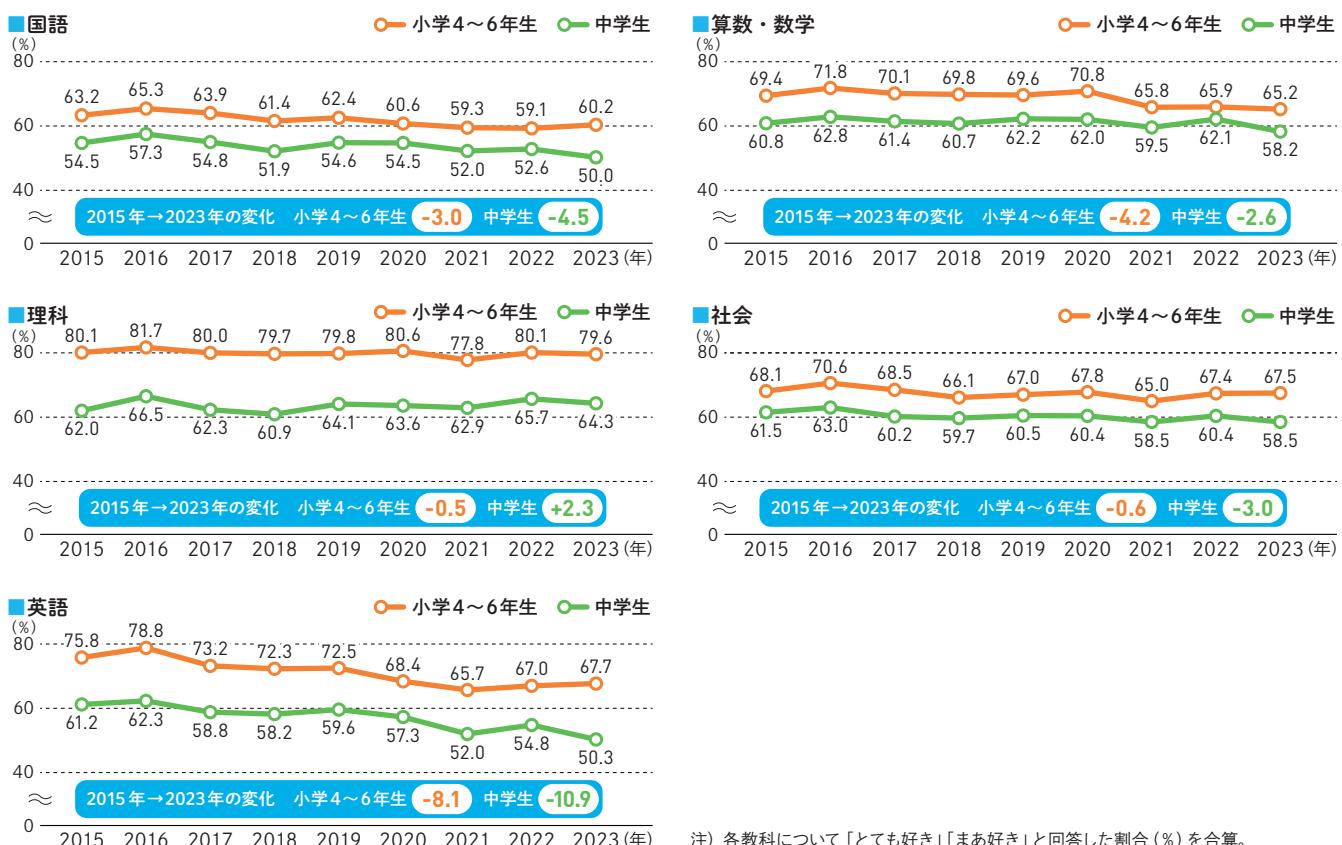


子どもの「好き」な教科の変化と、「好き」がもたらす影響

子どもの興味や関心を引き出し、主体的な学びを促進するためには、その教科を「好き」という気持ちが重要だと考えられる。今回は、子どもの教科に対する「好き」の経年変化と、「好き」がもたらす影響に焦点をあてた調査データを紹介する。

1 新学習指導要領の実施以降、英語を「好き」な子どもが大幅に減少

図1 教科の「好き」の割合の変化（学校段階別、2015～2023年）



注) 各教科について「とても好き」「まあ好き」と回答した割合(%)を合算。

学年が上がるにつれて「好き」は減少

国語、算数・数学、理科、社会、英語について、子どもが「好き」という割合が、2015～2023年でどのように変化したかを分析した（図1）。その結果、どの教科も、小学4～6年生より中学生の方が「好き」の割合が低かった。学年が上がるにつれ、学習内容が難しくなり、学習量が増えるため負担感が増し、各教科の「好き」な割合が減少していくのではないかと考えられる。

図示はしていないが、性別による比較では、小学4～6年生・中学生ともに、

女子は国語、英語を、男子は算数・数学、理科、社会を、「好き」と答える割合が高いことも明らかになった。

国語、理科、社会は8年間でほぼ変化なし

教科別に「好き」の割合を見ていくと、2020年以降、英語を「好き」な子どもが他教科に比べて減少していることが明らかになった。新学習指導要領の実施により、小学5・6年生では外国語教育が教科化され、学習評価も行われるようになった。小学5年生から英語の「読み」「書き」の学習も始まり、小・中学校で

学ぶ単語数が約2倍に増加した。そのため、小学生は「よい成績を取らなくては」と英語学習へのプレッシャーを感じるようになったこと、中学生は学習内容の増加に伴って負担感が増えたことが、英語が「好き」な子どもの割合が減少した要因として考えられる。

図示はしていないが、女子の算数・数学を「好き」な割合が、小学4～6年生・中学生ともに減少していることも分かった。一方で、女子の国語、理科、社会を「好き」な割合は、大きな変化が見られなかった。

出典 「子どもの生活と学びに関する親子調査」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトによる調査。小学1年生～高校3年生までの親子約2万組を対象に2015年から毎年実施。子どもの成長のプロセスとそれに影響を与える要因を明らかにしている。本報告は2023年までの調査結果による。

◎詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=5438>



データ解説

ベネッセ教育総合研究所

主任研究員

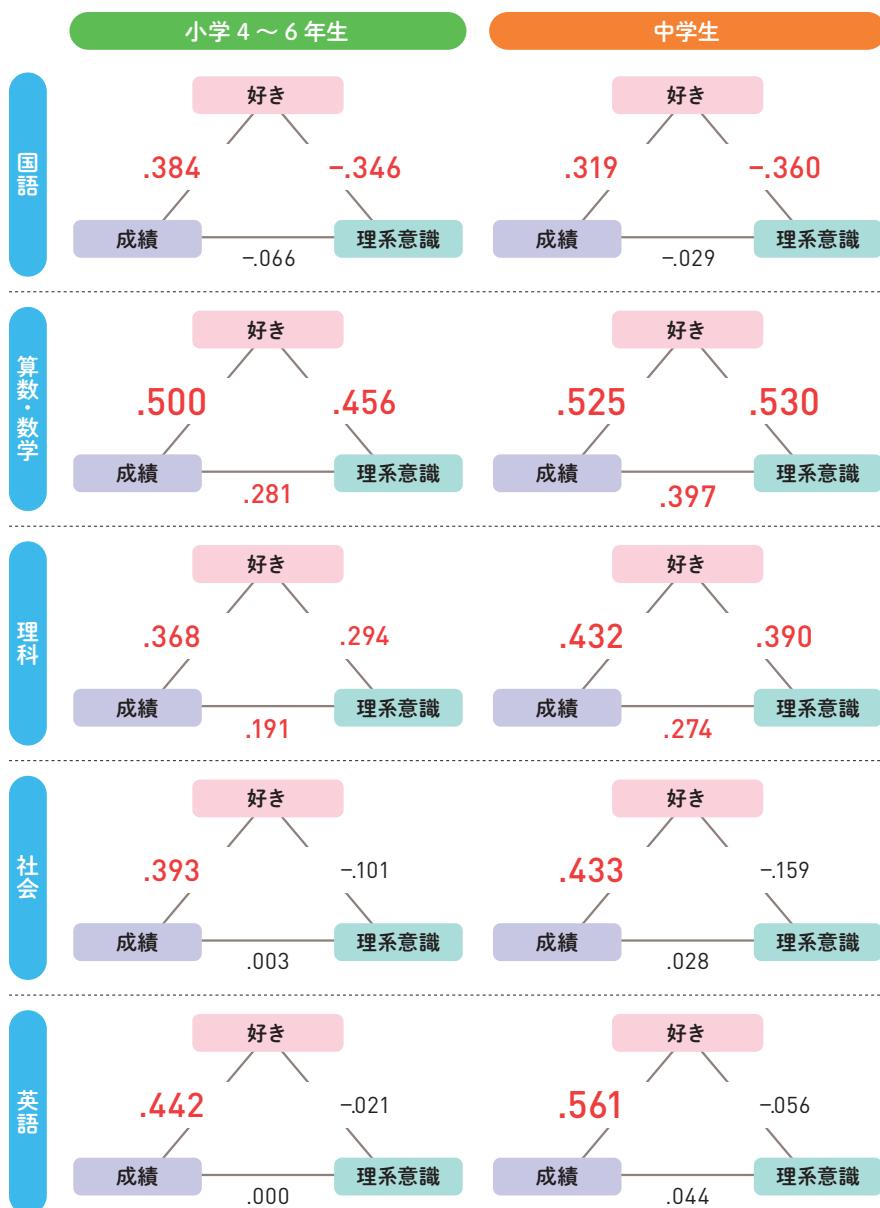
松本留奈 まつもと・るな



乳幼児から高等教育まで幅広い教育段階において、子ども、保護者、教員を対象とした意識や実態の調査研究に多数携わる。自律的学習者が育まれるプロセスと、そこに対する適切な支援のあり方に関心を持っている。

2 教科を「好き」という気持ちと「成績」には強い相関

図2 教科の「好き」と「成績」「理系意識」との相関



理系教科の「成績」が「理系意識」に影響

次に、教科を「好き」という気持ち(以下、教科の「好き」と、「成績」「理系意識」(自分は理系だという認識)の相関関係を分析した(図2)。その結果、いずれの教科も、教科の「好き」と「成績」には相関があることが明らかになった。特に算数・数学と英語は相関が強く、中でも中学生は相関がより強かった。このことから、ある教科を「好き」な気持ちが「成績」に好影響を与える一方で、成績が悪くなるとその教科を嫌いになる可能性が高いと言える。

また、算数・数学と理科の「好き」は、「理系意識」と相関があることも明らかになった。さらに、算数・数学と理科は、小学4～6年生・中学生ともに、「成績」と「理系意識」との相関も見られる一方で、ほかの3教科は「成績」と「理系意識」との相関は見られなかった。このことから、「理系意識」を持つかどうかは、小学4～6年生・中学生とも、算数・数学や理科の「成績」がよいかどうかに左右されると言えそうだ。

ここまで分析で、教科の好き嫌いは、教科の成績や文系・理系意識の形成に強く影響することが分かった。だからこそ、学年が上がるごとに「好き」の割合が減少する教科があることは課題だ。小学生の段階では、学習が「できるようになる」と同時に、各教科を「嫌い」にならないような学びが重要であろう。また、子どもたちが文理選択をする際に、学びたい内容よりも教科の好き嫌いや成績を理由に、進路決定が行われていたら残念なことである。子どもたちの興味・関心を軸に、進路を選択できるような支援や環境づくりが求められている。

注1) 数値は相関係数、-1～1の間の数値を取り、1に近いほど強い正の相関があることを意味する。

注2) 各教科の「好き」→4「とても好き」、3「まあ好き」、2「あまり好きではない」、1「まったく好きではない」。

注3) 各教科の「成績」→5「上の方」、4「真ん中より上」、3「真ん中」、2「真ん中より下」、1「下の方」。

英語の成績は小学4年生にはたずねていないため、小学5・6年生を対象に分析。

注4) 理系意識→5「はっきり理系」、4「どちらかと言えば理系」、3「どちらとも言えない」、2「どちらかと言えば文系」、1「はっきり文系」(数値が高いほど「理系」と認識していることを示す)。